内館牧子賞

「今まで見えていなかった看護」

受賞者：長野 樹さん

看護師2年目の冬、私達家族に起こった悲劇。寒い冬の深夜、父が心停止した。母も私も看護師、妹も看護学生、看護師一家で心強いねと言われてきたがこの日だけは看護師であることが辛かった。父がかかった劇症型心筋炎は致死率50％。医師の言葉一つ一つに最悪の事態が起こる可能性が高いことが伝わったからだ。父は今まで見てきたどの患者さんよりも重症だった。たくさんのチューブが入り、人工呼吸器や補助循環装置管理下のため鎮静をかけられ意識のない状態であったが、握った手だけはいつもの父の手だった。絶対諦めてはいけないとそう心に決めた瞬間であった。

急変して半日も経たないうちに大学病院への転院を勧められ、たくさんの医療職の方が救急車に同乗して転院することになった。目まぐるしく変わる状況に対応しきれず、口には出さなかったが本当に大丈夫なのか家族はみんな不安だったと思う。転院手続きが終わり、一緒に救急車に同乗してくれた看護師さんが挨拶に来てくれた。「また元気になったら皆さんで顔を出しに来てくださいね」と。その時の私達にとってその言葉がどれだけ力になったか。家族以外の人が父は元気になると思ってくれている、父は助かるのだと。今でもこの時の状況や気持ちは昨日のことのように思い出す。

それまでの私は看護師としてまだまだ経験が浅く、看護師としての役割や看護の重要性が分かっていなかった。患者さんにとっては医師の言葉が絶対で看護師の言葉は届いていないのではないかと思う時もあった。けれどそうではなかった。看護師の言葉は、看護の心は患者さん自身に、そして患者家族の心に響くのだと。

心停止から8カ月経ち、父は無事に自宅退院できた。コロナ禍もあり、まだあの時の看護師さんに会えてはいないがいつか家族全員で元気になったよ！ ありがとう！ と伝えにいきたい。絶望の淵にいたあの時の私達を救ってくれてありがとう。